

はないにしても、相対的にはもっとも大きな力を獲得してくる時期<sup>33)</sup>というものをかれらが青年期に達するまでの一定の期間において考えるということ自体にはなんらの問題もないのではなからうか。

#### a. 子どもの好奇心と有用性の原則にもとづいた教育

ところで子どもがその必要よりも力がかかるに発達するこうした時期こそ、ルソーによれば子どもが自然について学んだり、また仕事をおぼえたりする時期なのである。ルソーはいう、「同一の本能が人間のさまざまな能力を刺激する。のびていこうとする体の活動について知識をもとめようとする精神の活動があらわれる。はじめは子どもは体を動かしているだけだが、ついでかれらには好奇心が湧いてくる」<sup>34)</sup>と。もっともこうした好奇心もそれが正しく導かれなければ決して実りゆたかなものとなることはできないであろう。その第一の理由は人間の知性の有限性にある。再度の引用をいとわずにこれに関係するルソーの文章をかかげておこう。「人間の知性には限界がある。そしてひとりの人間はいついかにことを知るわけにはいかないばかりでなく、ほかの人間が知っているすこしばかりのことを完全に知りつくすこともできない。……だから、学ぶのに適当な時期を選ばなければならないのと同じように、学ぶことも選ばなければならない」。しかしなにを基準に選ぶのか。うえにつづいてルソーはいう。「わたしたちの能力で学べる知識のうちで、あるものはまちがっていたり、あるいは役にたたないものであったり、あるいは、それをもっている者の自負心をはぐくむものだったりする。わたしたちの幸福にほんとうに役だつ少数の知識だけが、賢明な人の、したがってまた賢明な人に仕立てあげたいと思っている子どもの、研究の対象となるにふさわしい。存在するものではなく、有用なものだけ

を知ることが必要なのだ」<sup>35)</sup>と。また、少数の、子どもの現在の生活にとってほんとうに役だってくれる知識だけを修得するように導いてやること、これが唯一教える側の責任だ、ということ強調するつぎのような文章もある。「子どもにはその時期に有益なすべてのことを教えるようにするがいい。それだけで、かれの一日の時間は十二分に利用されていることがわかるだろう。……わたしたちのほんとうの教師は経験と感情なのであり、けっして人間は人間にふさわしいことをかれがおかれている関連の外で十分によく感じることはないからだ。子どもは自分が人間になるように生まれついていることは知っているし、人間の状態についてかれがもつことのできるあらゆる観念はかれの知識をひろめる機会となる。しかし、人間の状態についての、かれの能力をこえた観念にたいしては完全に無知でいなければならない」<sup>36)</sup>。また、このほかにも無知をおそれるいわれのないことを強調する、「無知はけっして悪を生みださなかったこと、誤謬だけが有害であること、そして人はなにか知らないためにではなく、知っているためだけに誤ること、そういうことを忘れずに、たえず心にとめておくがいい」<sup>37)</sup>のような文章や、知識はわれわれの本能がわれわれに求めさせるものに限るべきことを強調する「……わたしたちの最初の研究からさらに、その好みが人間にとって自然でないような知識は捨ててしまうことにしよう。そして、本能がわたしたちにもとめさせる知識だけにかぎることにしよう」<sup>38)</sup>のような文章もある。しかしこのようにわたしたちに役にたってくれてしかも有限なわたしたちの知性にふさわしい知識とは具体的にはどのような知識なのかということがつぎに問題となるが、ルソーが最初に示す例はわたしたちの予想をはるかにこえた一見突拍子もないものであることをみとめざるをえないのではなからうか。なぜならそれはこれまでの子どもの体を中心にし、そのなかで子

33) Cf. *ibid.*, p. 427

34) *Ibid.*, p. 429

35) *Ibid.*, p. 428

36) *Ibid.*, p. 445

37) *Ibid.*, p. 428

38) *Ibid.*, p. 429